

## 序論

### 研究動機・研究目的・研究方法

ゴールキーピングの目的は敵のシュートを止め、失点を防ぐことであり、この目的を確実に達成することができれば、試合展開を有利にしていくことができる。筆者はゴールキーピングがチームの勝利に関わる重要な要素であると考え、ゴールキーピングに関して深く分析、研究していきたいと考えた。ゴールキーピングは、位置取り、構え、ミート動作など様々な局面が組み合わさって実行されており、ミート動作は中でもゴールキーピングの最終段階であり、必要不可欠な局面である。そこで筆者はゴールキーピングを捉えていく上でミート動作が重要であるとし、ミート動作に着目しながら研究を進めていきたいと考えた。

本研究の目的は、様々なゴールキーピングの場面をミート動作に着目して運動観察し、それらの運動構造を運動モルフォロギー的に明らかにすることによって、ゴールキーピングを類型化していくことである。その方法は、マイネル (K.Meinel, 1981) の運動モルフォロギー的考察法を用い、ゴールキーピングの場面をビデオ編集し、フィルムを用いて印象分析を中心に進めていく。具体的には、既存の構造体系論を把握した上で、平成 22 年度全日本学生ハンドボール選手権において上位に進出した大学のゴールキーパーのゴールキーピングを観察対象とし、マイネルの運動カテゴリーを用いて質的にそれぞれの微表を把握していく。その後分析した結果を既存の構造体系と比較しながら、ゴールキーピングの類型化を試みる。筆者は今後の競技生活、指導の場面で生かせるものにしたいと考える。

## 本論

### 第一章 ハンドボール競技の構造特性

ここでは、ハンドボール競技の特性についてまとめた上で、本研究の中心となるゴールキーピングの特性を述べる。ボールゲームの一般理論 (G.シュティラー, 1993) に基づくとハンドボールはチームスポーツ種目に属し、ハンドボールのゲーム活動の目標は、ボールを手で相手チームのゴールに投げ入れ、自分のゴールを相手の攻撃から防御することにある。また、ハンドボールプレイヤーは運動的領域や精神的、道徳的領域など、多面的な基礎能力を身につけ、それらを独自の競技能力として十分に発揮することをめざして努力しなければならない。また、ゴールキーピングにおけるミート動作はゴールキーピングにおける最終段階であり、ゴールキーピングの目的の達成において、重要な役割をなす局面であり、様々な形態を観察することができる。

### 第二章 ゲームの運動観察法

ここではゲームの観察方法として運動モルフォロギー的考察法を用いる。他者観察の不可欠な前提となる印象分析を行い、マイネルの運動カテゴリーにより、「運動の局面構造」、「運動リズム」、「運動の先取り」、「運動の正確さ」を中心にゴールキーピングの運動構造

を解釈していく。モルフォロギー的考察法は、スポーツ運動を目を通して外から知覚していくだけでなく、体験し、中から知覚することによって大きく補充され、拡大される。印象分析を行なう上で、他者観察の自己観察化を充実させるため、「共同観察 (佐藤, 2002)」によって研究を進めた。類型化とは、個々の存在あるいは現象の間の類似点を抽出し普遍化することであり、様々なゴールキーピングを観察するなかで、動きの形態の類似点を抽出することでいくつかのグループに分類し、構造体系を明らかにすることが、本研究においての類型化である。類型化し、構造体系を明らかにすることは、ゴールキーピングについて、運動形態的な特徴を知ることにつながり、それが系統的な指導に重要な示唆を与えてくれる。

## 第三章 ゴールキーピングの類型化

この章では、全日本学生ハンドボール選手権大会におけるロングシュートに対するゴールキーピングの場面を抽出し、ミート動作に着目しながらそれらの印象分析とその結果の考察を行い、既存の体系と比較しながら類型化を試みた。その結果、既存の体系にはないゴールキーピングを類型化することができた。それらが以下の4つの類型である。

・「片手ドイツ型」(高い位置のボールに対して)

— 飛び出しはドイツタイプであるが、片手でミートする点で既存の「両手ドイツ型」と異なり、素早く高い位置のボールに対応ができる。

・「片手両足型」(高い位置のボールに対して)

— 両足で踏み切り飛び出す点が特徴であり、既存のものでは両足によって飛び出すゴールキーピングはない。より高い位置のボールに対応することができる。

・「中間片手スライド型」(中間の位置のボールに対して)

— 既存の「中間両手スライド型」との違いは、片手のみをミート方向へ向かわせる点である。構えた状態からより少ない動作によってボールをミートすることができる。

・「中間両手スライディング型」(中間の位置のボールに対して)

— 中間の位置のボールに対してスライディングをしながらミートする。ミートポイントに体の多くの部位が向かう。また、足が接地する前にボールをミートする。

## 結論

本研究では、ミート動作の局面に着目しながら、試合におけるゴールキーピングの運動経過を質的に観察、分析することによって、ゴールキーピングを類型化することができた。本研究の類型化ではゴールキーピングの構造体系を明らかにし、既存の体系に新たな4つの類型を加えることができた。それぞれの類型は異なる運動形態的な特徴をもっているが、シュートを阻止する目的においてはどれも正しい運動である。類型化によって、自身のゴールキーピングの体系論が豊かになり、指導上においてゴールキーピングの多様性について大きな示唆を与えてくれる。また、学ぶ側にとってはより多彩なゴールキーピングを認識することにつながる。

(引用・参考文献省略)